

『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol. 3



テキスト『翻訳と連帯ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳者・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で無料公開され、閲覧・ダウンロード・印刷は自由です。右のQRコードからつながります。264話全訳データは <https://fire.st/h6yqlut> にあります。



日時 **12月2日**
(土)午後1時15分～4時半

場所 **赤羽北区民センター** (赤羽北ふれあい館)
第1和室(椅子・座布団あり。アクトピア北赤羽六号館3階)
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分、北区赤羽2-25-8

参加費ひとり **500円**(要予約)

主催(予約)前田年昭

tmaeda1966516@gmail.com080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。
- 当日は以下の予定で、報告者の問題提起および感想や意見の交流、討議を行います。
- あらかじめ対象話を読んできてください。電子版を読めない方はご相談ください(今回の、採り上げる3話のテキストをおくります)。



報告1

13:30～14:00前田年昭(組版労働者)

死に打ち勝ったチョチャンヂュ ベク・ハンリム(6巻4話)

14:00～14:15討議

報告2

14:15～14:45キム・ヨンイル(福祉労働者)

いつでも革命的警戒心を高めなければならない キム・デホン(10巻13話)

敵を瓦解させて チェ・ヒョン(6巻14話)

14:45～15:00討議

15:15～16:30全体討議

第1回読書会(5月20日)で、「抗日パルチザン参加者たちの回想記」の歴史的背景である1930～40年代の朝鮮人民の抗日革命闘争史を学んだ私たちは、第2回読書会(8月13日)で、3人の参加者からそれぞれの問題意識に基づいた報告、提起をうけて、全員で意見交換しました(裏面参照)。

差別や抑圧、抵抗の闘いの歴史を知り学ぶことは、私たち自身の生きる糧です。他方、日々の対立や争いの個別・具体は、けっして歴史一般には解消されえず、解決はあくまで個別・具体をとおしてでしかなしえないことも、釜ヶ崎での朝鮮人手配師と日本人労働者との関係にみるように明らかです。

この点で日本の労働運動、左翼運動が、口先では国際連帯をうたっても実際は、労働組合が「朝鮮人労働者の雇用反対」でストをうつ(戦前の恐慌期)、戦争責任で支払うべき請求権資金を「朴にや

るなら僕にくれ」とスローガンに掲げる(戦後、日韓条約反対闘争)など、恥ずべき排外主義は克服できていません。「子どもたちを守るために不審者は通報を」といたるところでアナウンスされるなど、百年前の過ちをふたたび三たび醸成するような雰囲気がつくられてきていることも事実です。

労働者に国境はありません。被害者にも加害者にもなることなく、国際主義を生きるにはどうすればいいのか。私たちは何のため誰のために、抗日パルチザン回想記を読もうとするのか、明確にしつつ議論を深めていきたいと考えています。

第3回は引き続き、全264話から回想記をいくつか取り上げて、報告者からの報告のあと全員で討議をします。

ともに読み考え、話し合いましょう。ご参加をお待ちしています。

(農家で育てて作男暮らしまでしたトムムならば薪を伐るぐらい簡単にできるはずなのに、なぜこんなに下手なのか?) —— キム・デホンの回想

誰一人根拠地を離れようとしなかった。根拠地は生の家であり、闘争のゆりかごだった。 —— ペク・ハンリムの回想

説得工作を主にして彼らに反日思想をたゆまず注入する一方、彼らに遊撃隊を幫助させることによって日帝に対して罪を犯させることが必要だった。 —— チェ・ヒョンの回想

第二回読書会での報告を終えて

真に人間である、いっ

田代ゆき(組版労働者)

居住するテントが敵の襲撃を受けたあと、裁縫部隊の女性たちが「奴ら」のふみつけてだめにした鍋や器を叩いて伸ばし煮炊きを始める(「明けてくる明日のために」)。焚火に互いの顔を照らしながら明日について語り合う場面が好きだった。テントに意味もなく火を放ち、銃を撃つては四方ひっくり返す「敵」と、裁縫機や作った冬服を命がけで守ろうとする彼女たちとは、鮮やかな対比を成して映った。

遊撃隊の彼らが奪われても奪われても決して手放すまいとしたもの、それは一将でも名譽でもなく、ものを作るための道具であり、負傷した仲間を背に負いきに行く選択であり(熱い心臓)、魚と水のごとく人民と離れるまいとする意思(「ウァンウグの人民」)——人民は時に目配せや命をかけた沈黙で、唯一の持ち物である一身を車輪の前に投げ出して、遊撃隊を助けました——であり、すなわち、真に人間であることだと知った。そのことは、彼らの闘いが明日を

拓く闘いであることの証拠でもあるだろうと思つた。翻って日本の東アジア侵略が、意図してこの、束となった力を引き裂く行為であったことを思うとき、帝国主義と資本主義とがひとつながつて見え、日本人と私たちの戦いは何一つ

痕跡を消し去ろうとする者に抗して
名を刻むこと

キム・ヨンイル(福祉労働者)

私は、『不屈の闘士』と『任務を遂行するまで』を取り上げて報告した。『不屈の闘士』では、重傷を負い右腕切断を迫られる兵士が、革命は戦闘で敵を倒すことだけではなく腕を失つても担う任務はたくさんある、という視点を同志から学び、手術を決断する(その兵士は民生団事件をくぐり抜けてきた闘士であった)。

『任務を遂行するまで』では、日帝の追討による満身創痍の後退からの反転攻勢——それまでの地域住民への工作が実を結び建設された人民の森に潜み、回復

終わっていないとわかつた。

討議中、「真の人間」について「抽象的な言葉」であり「大変危険」と批判する人がいた。報告で私はその語を天から降ってくる概念としては使わなかつた。口にするときには必ず、共に荷を負おうとする背、反復に耐え種をまく手、死を前に不屈の意志を確かめ合う視線がはりついている。そして私はそれを、階級的連帯という以外にあらわす言葉を知らない。 ☆

と兵力の増強で反撃を準備し、敵拠点を制圧、圧倒的に勝利する。人民との結合というものを鮮やかに描いた一話である。また、徐大肅『金日成』から、

資本家階級思想か労働者階級思想か

「効率を求めない闘い方」を糧に

須田光照(労働運動家)

私の報告では次の4点を提起しました(レジュメ表題より)。(1)加害の歴史と向き合う——なぜ残酷になれたのか、(2)日本はだれに敗北したのか、(3)抗日パルチザンの進歩的思想、(4)現在

も「抗日」は続いている。朝鮮を侵略した日本軍の正体は「軍服を着た労働者」、すなわち私たちの先輩でした。戦前日本労働運動は現在と比較にならないほど資本家と果敢に闘つた歴史があります。その意味では誇るべき先輩労働者たちほどこで足をすくわれたのでしようか。報告では1932年の地下鉄争議で出征兵士の雇用・賃金保障を筆頭要求に掲げたことを例に検討しました。

また、論争になった「戦死」の差異について、「侵略戦争と抵抗戦争を同じものにはできない」人肉体的生命と同時に社会的生命をもっている」とする前田意見には蒙を開かれ大いに共感しつつも、生者が死者を継承しようとする事、蘇らせようとする事については検討を続けたいと思う。 ☆

「効率を求めない闘い方」と報告しましたが、これが労働者階級の思想だと思います。それは「人間愛」一般などではなく、労働者一人ひとりの存在と力で新しい社会をとりに作ろうという展望に基づく闘いです。抗日パルチザンのように私も生きたいと思いました。 ☆

討議で、日本軍はたしかに残酷だったが、残虐一般を問題にしても真の解決の方向は見出せないという趣旨の意見が出ました。その通りだと思いました。一方、日本軍の死も抗日パルチザンの死も同じ死ではないかという趣旨の意見が出ました。これは違うと思いました。「だれが何のために」の問いが討議で交わされ、問題の核心は思想であることが私の中で鮮明になりました。資本家階級の思想なのか、それとも労働者階級の思想なのかという問題です。飢えと寒さに呻吟しつつも負傷した同志を見捨てずに背負いながら雪道を一步一步進む描写が回想記に何度か出てきます。